2018年（平成30年）3月21日（水曜日）　地域　山形新聞
（第三種郵便物認可）　第47661号

ながまち荘（山形）最優秀

特色ある取り組み紹介「介護甲子園」

「胃ろうゼロ」のケア 高評価

山形市の特別養護老人ホームながまち荘（峯田幸悦施設長）が日本介護協会主催の「介護甲子園」施設部門で最優秀賞に選ばれた。口からの食事再開につなげる「胃ろうゼロ」の取り組みなど特色ある介護をアピールし、高く評価された。介護人材の不足が全国的な課題となる中、大会の成果を弾みに「介護職の魅力とやりがい、誇りを広く発信していきたい」と意気込んでいる。

介護甲子園は、全国の施設の優れた取り組みを共有し、介護職の発展につなげようという大会。7回目の今回は施設と在宅の両部門に6472件の応募があった。インターネット投票を経て、各3事業所が2月22日に大阪市で開かれた決勝大会に進み、ながまち荘は施設部門のトップに輝いた。

ながまち荘は入居者の自立支援に向けた「007の誓い」を紹介。おむつゼロ、たばこゼロなど7項目を掲げており、このうち食を諦めない支援として、胃ろうゼロの取り組みを寸劇と映像で発表した。

脳梗塞で寝たきりになり、経管で栄養摂取していた80代女性を例にケアの過程を解説。山形済生病院と連携して内視鏡検査を行っており、喉の状態や飲み込む力などを個別に検討し、食べ物の大きさやとろみ剤の要否などを調整していることを伝えた。

一連のケアにより、女性は3年ぶりに口からの食事を再開できた。業務主査の岩崎勝也さん(45)は「食事は身体的にも精神的にも支えになる」と強調する。失語症の認定を受けた利用者が会話できるまで回復したケースもあるという。

決勝大会では外国人介護福祉士候補生に指導する形で発表し、具体的に伝わるよう工夫した。担当した伊藤雄太さん(27)は「介護職は専門性が高く誇らしい仕事。取り組みが評価されるのはうれしい」と話す。岩崎さんは「『私にご飯を食べさせてくれてありがとう』と言葉をもらったこともある。可能性を見つけてよりよい生活につなげる。それが介護職の喜びだ」と語った。

最優秀賞に輝いたながまち荘の職員
＝2月22日、大阪市・インテックス大阪